

Title	日本バプテスト連盟と東日本大震災(パネルディスカッション「震災への関わりと震災の語り」)
Author(s)	濱野, 道雄
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 69-77
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5338
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

日本バプテスト連盟と東日本大震災

濱野道雄

私は震災が起こってから現在に至るまで、日本バプテスト連盟東日本大震災被災地支援委員会（以下、東日本委員会）の委員を続けさせていただいている。

ここでは日本バプテスト連盟の諸教会と東日本委員会および現地支援委員会の活動等を紹介し、そこに神学的そして宣教論的省察を加えさせていただきたいと思う。

1. 活動理念

最初の一カ月は文字通り命に関わる時であったので、ともかく皆、動き回った。そしてその段階が過ぎるころ、これを教会の働き、つまり宣教として位置づける言葉の必要性を感じた。そうでなければ、長期間にわたり必要となるだろう支援の働きに対して、被災地以外の全国の人々、そして海外へ支援の要請と説明を続けることが難しいと考えたから

である。そしてその活動をする私たち自身にも、教会に仕えることを仕事として行っている者として、またキリスト者として、なぜこの支援活動に向き合うのか、その動機の整理や維持のためにも言葉が必要に思われた。阪神淡路大震災の経験から、善意からだけの行動は、それは大変尊いものではあるが、しかしいつしか燃え尽きることもあると知っていたからである。

そして東日本委員会の活動理念は次のようにまとめられた。まずそこに立つべき聖書の言葉として、Ⅱコリント五・二八―一九「これらはすべて神から出ることであつて、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。つまり、神はキリストによつて世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです」をあげた。そして活動理念を次の二つの文章にまとめた。

日本バプテスト連盟東日本大震災被災地支援委員会の理念

*「和解のつとめに仕える」。神と人、人と人、人と全被造物における和解、福音における新しい交わり
の創造に仕えていく。

*被災地の痛み、悲しみ、苦悩のただ中に働いておられる十字架のキリストに目を注ぎつつ、被災地の
人々と尊重し合い、学び合う関係を大切にし、復活の命と希望を分かち合つていく。

真の復興 reconstruction には、和解 reconciliation が必要と考えたのである。十字架の神学を中心に据えた和解論と
いつてもいいかもしれない。今回のシンポジウムのサブタイトルに「苦難を通し」とあるが、そのために十字架の神学
が不可欠に思われた。そして、「壁を越えて」のために和解論が不可欠に思われる。「和解のつとめに仕える」は、震

災前からあった言葉で、日本バプテスト連盟中长期大綱(二〇一一―二〇二〇年)の表題、『和解のつとめに仕える』――和解の福音に生きるバプテスト教会の形成と伝道』にあった言葉である。グローバリゼーションの中で大切な鍵概念となるであろうと、和解という言葉を使ったが、それが震災支援においても有効であったと思う。

和解と震災支援がいかに関係すると考えたのか、震災直後に考えたことを紹介させていただく。震災直後にキリスト新聞社発行の『ミニストーリー』という雑誌に掲載してもらった拙稿である。

神と人の和解の言葉は何か。「神も仏もない」と思わされる状況で、いかに神義論が語られるのか。そこでは安易に「全能の神」を強調する栄光の神学に注意すべきだ。共に苦しむ神という十字架の神学が必要。又「なぜ自分だけが生き残ったのか」というサバイバー・ギルトを抱える人々は被災地の内外で多い。「あなたの命は神の目に尊い」という十字架の赦しと寄り添いの言葉が求められる。それと同時に、「このままでは終わらない」という終末論的希望の言葉が望まれる。その際、神の国は「来る」ものであり、人間が安易に「造り出せる」ものではないことに注意すべきだ。事故後も「人類の進歩を止めてはならない」ので、より強固な原発を造るべきという意見がある。しかし人間は命を差し置いても求めるべき未来の姿の「答え」を持ち合せていない。さらに丁寧な葬儀が不可能な状況で、適切な弔いの言葉が宗教者に求められているが、これも終末論的希望の言葉であろう。

人と人の和解の言葉も必要だ。被災者と支援者(実際は単純に分けられない)をつなぐ言葉が求められる。具体的な支援活動からその言葉が生まれ、その言葉から支援活動が力を得てゆく。また和解のプロセスには「裁き」が含まれる。原発人災においては、加害者と被害者の関係を問う言葉が必要。直接の加害者である「原子力村」(電力会社と行政)の責任は免れない。それと区別しつつ、しかし同時に、「原発立地のし

わ寄せの上に、成立する都市部の生活」という構図を転換してゆく、一人ひとりを問う言葉が必要（沖縄やグローバル化の課題と同じ）。また放射線への無知が福島差別を生むので、正しい知識の言葉が必要。さらに原子炉のアジア輸出など、金と軍事力確保のための原子力行政を問いなおす言葉が必要だろう。

そして神と全被造物の和解の言葉。「災害も神の創造の御業の一環」と言えるのか。津波も、地震も、自然とその現象は、神ではない。全被造物も完成されておらず、神との和解を待っている。さらに人と全被造物の和解。原発避難地域の家畜の殺処分、世界レベルの海洋汚染、大気汚染などの課題を見据える言葉が必要とされる⁽¹⁾。

2. 東日本大震災被災地支援委員会と活動

この理念のもと、実際にどのような委員会を組織し、どのような活動を行ってきたかをお話する。東日本委員会、二〇一三年度は七つの部門からなっている。一番目は全体計画立案と神学的考察をする部門。二番目は被災地にある教会を通して被災地を支援する部門であり、東日本委員会とは別の、現地の教会からなる現地支援委員会との連携で動く部門である。三番目は遠野ボランティアセンターの部門。こちらでは、全国からのボランティア、そして西南学院大学や東京女子大学の学生たちがボランティア活動をする、その整えをしてきた。しかし今年度で閉鎖となり、形を変える。四番目が被災地教会支援。これは直接被害を受けた教会やその施設、また牧師たちへの支援である。五番目が原発課題への取り組みで、私はこの担当責任をしている。現在は保養プログラムや医師による健康診断、また、いわゆる「除染」支援などを行っている。六番目は国内外への情報発信をする部門。七番目は建物、機材の管理をする部門となつ

ている。

先ほど申した現地支援委員会は三つのチームからなっている。青森・岩手チーム、宮城チーム、福島チームである。これらは現地の教会からなる委員会であり、丁寧に地域の人々と関わりながら、仮設住宅支援等を通し現地共同体の再創造をし続けている。ここでも教会と地域の「壁を越えて」和解の働きが行われているといえよう。

この壁を超える働きは、募金からも見てとることができる。二〇一三年八月までの状況は、東日本委員会と現地支援委員会への募金総額は二億一二九万五三六五円で、このうちの四八・二％は海外からの募金である。幾度となく海外から被災地へも足を運んでくださった全世界の教会の方々に心から感謝し、神の和解の業をそこにも見出す次第である。

3. 課題

海外の教会からは募金をいただくだけではなく、有益なアドバイスを受けることもできた。例えば二〇一二年にマレーシアで開催された、アジア・太平洋地区バプテスト連合の支援関係者やクリスチャンワーカーの集まりでは、広域にわたる長年の経験から各国の支援活動の比較とその課題を提示してもらった。例えば、日本での支援活動では、他国と違って課題となることに、言葉の壁がある。また支援者の支援がなされにくいといった点も指摘されていた。支援者の支援が困難で、支援者が孤立し、持続可能な活動になりにくかったり、次世代を含めて広範囲におよぶ連帯を得にくかったりするという点は、日本の教会においては特に課題かと思われる。

他にもいくつかの課題がある。東日本委員会では「東日本大震災と原発事故が問いかける宣教・神学フォーラム」を

二〇一二年と二〇一三年に開催した。ここでは、一時立ちどまり、私たちの活動を聖書に問い、また宣教論的に考え直すことを行った。

二〇一二年のフォーラムから上がってきた課題は五つにまとめられた。⁽²⁾

1. 「伝道か支援か」という二元論の克服。両者を宣教活動の中に捉えるホリスティックな宣教論が必要となる。
2. 和解の福音の理解と実現。これは基本的理念そのものに関係するものである。
3. 教会の祭司性と預言者性。この世界に寄り添う祭司としての働きと、この世界に抗して、カウンタカルチャーとして預言者性をもって働く、二つの教会の働きである。この二つを、どの場面でもどちらを發揮すべきなのかが問われる。
4. 十字架の神学の強調。しかしそれが「犠牲の美化」にならないように、罪の裁きと赦しということをどう捉えていくのかを再検討する。
5. バプテストとしての協力伝道と各個教会主義。例えば、福島の教会においては人々を避難させることが宣教になる場合もあるだろう。その場合、バプテストの各個教会主義を孤立教会主義にさせずに、教会間協力の内に進める必要がある。自立が協力を支え、協力が自立を支える関係の創造が必要である。

二〇一三年のフォーラムではこれらの課題を踏まえながら、現地におけるニーズのピークはまだこれから先に来るといふ予測が立つ中で、支援をいかに教会にとって持続可能な形にしていくのか、そのために必要な宣教論と神学は何かを問うていった。私見であるが、持続可能な支援にするために、先の五つの課題に触れれば、十字架の神学から和解の神学へ、祭司性から預言者性へ、慰めから罪の認識へと、前のものを捨てるのではなく、前のものを含みながら拡げて

いく必要が感じられた。つまりまさに、「苦難を通し」から「壁を越えて」へ行く必要である。壁を越えるときには、「世の光」として暖かさだけではなく、「地の塩」としての厳しさが必要になるだろう。なぜなら、「東日本大震災と原発事故が問いかける宣教・神学フォーラムⅡ」の報告書からの引用になるが、「看過してはならないのは、大震災は単なる災害ではなく、様々な問題が複雑に絡んでいることである。特に、「原発問題」には、今日の日本社会が抱えている様々な問題が集約されている。……単なる環境の問題だけではなく、政治、経済、国際秩序、軍事増強など、様々な問題が絡んでいることに気づかされなければならない⁽³⁾」からである。

これは、この世界の価値観自体への問い直しが必要とされるということである。世界教会協議会(WCC)の言葉を借りれば、「和解は、到達すべき目標であると同時にプロセス⁽⁴⁾」であり、そのプロセスには「悔い改め、正義⁽⁵⁾」が不可欠だからである。

それは同時に教会自体も自己反省するように問い直されるということであろう。つまり、力の増大や効率ばかりを求めたり、原発労働者の問題にも関係するが、次世代の人々を教会維持のための道具と見なしたり、安易な「ピンチをチャンスに」論に走っていないかが深く問われると思う。

4. 壁を越えて、次の世代へ

このように、自己反省も含めて和解の業を為す時に、壁を越えるということが起こってくるのだろう。震災支援活動においては、この「東日本大震災国際神学シンポジウム」もそうだが、エキユメニカルな拡がりや豊かに生まれてきた。それはこの世界の価値観を問い直す運動でもあるので、狭い意味での震災支援を超えた連帯になっていく。例え

ば、原発事故被災者を支援するということは、原子力関連の情報開示を政府や関連機関に求めるということでもあり、特定秘密保護法への反対運動が展開してきている。実際に、震災支援がなければ出会わなかったかもしれない何人もの信頼できる牧師の方々と、現在、「特定秘密保護法に反対する牧師の会」を通して共に歩むことができることを感謝している。

またそのように壁を越える時に、「次の世代へ」が始まるのではないか。私の勤める西南学院大学は福岡にあり、被災地からは遠く離れているが、二〇一三年度も、神学部学生会も含めて九つのチーム、約一〇〇名の学生がボランティア活動に参加した。そこでは東北学院大学等、他の大学との連帯も広がっている。またその報告会で学生たちが異口同音に語っていたのは、「自分自身がこれからの人生を歩むヒントと力をもらった」ということである。この世界の価値観の問い直しを経験した人たちは、新しい世界を創造していく、神の国を待ち望む動きに繋がっていくのであろう。

その際、課題の一つとして感じることは、原発課題をいかに若い世代と共有するのか、ということである。東日本委員会としては、放射線管理区域にあたる放射線量が出ている地域には四〇歳未満のボランティアは送らないという方針できた。そうすると、青年たちを福島や郡山へボランティアに送れないことになる。この世界の価値観の問い直しのためには、今何が福島で起こっているのかを共に学ぶべきではあるが、困難さがそこにはある。しかし、たとえば目で見ること、手で触れることができなくても、痛みを共感し、それを超える希望を見出すことが、信仰の言葉によればできるのではないか。そこに可能性とチャレンジを感じつつ、これからも歩んでいきたいと思う。

注

- (1) 拙稿「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」『Ministry』Vol.10、キリスト新聞社、二〇一一年、六三―六四頁。
- (2) 吉高叶「フォーラムを振り返って」日本バプテスト連盟宣教研究所編『教会は何を危機、何を語ってきたのか——東日本大震災と原発事故が問いかける宣教・神学フォーラムⅠ報告書』日本バプテスト連盟東日本大震災被災地支援委員会、二〇一二年、六八―七三頁。
- (3) 朴思郁「震災フォーラムⅡ」を振り返って」日本バプテスト連盟東日本大震災被災地支援委員会『教会はなお聞く「聖書に現実に経験に」——東日本大震災と原発事故が問いかける宣教・神学フォーラムⅡ報告書』、二〇一四年、一三八頁。
- (4) 世界教会協議会世界宣教・伝道委員会編（神田健次監修、加藤誠訳）『和解と癒し——21世紀における世界の伝道・宣教論』キリスト新聞社、二〇一〇年、四二頁。
- (5) 同上、四三頁。